

学習方略の使用におけるメタ認知的知識と達成目標の役割

YAMAGUCHI, Tsuyoshi / 山口, 剛

(発行年 / Year)

2017-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第388号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2017-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(心理学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013936>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	山口 剛
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	第 612 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 藤田哲也 副査 教授 福田由紀 副査 同志社大学教授 田中あゆみ

学習方略の使用におけるメタ認知的知識と達成目標の役割

1. はじめに

山口 剛氏提出学位請求論文「学習方略の使用におけるメタ認知的知識と達成目標の役割」は、本研究の主要な論考を構成する実証的研究が、心理学系では国内でもっとも権威のある学術雑誌である「教育心理学研究」「心理学研究」に掲載されている。またそれ以外のほとんどの部分についても「教育工学会論文誌」や「法政大学大学院紀要（人文科学・社会科学系）」に掲載され公開されている。これらの各研究を、学位請求論文の目的にふさわしく全体としての統一性を構築し、論述の一貫性を確保するために加筆修正したのが本研究である。

本研究の論文構成は、以下の目次の通りである。

2. 論文の目次

第 1 章 問題と目的

第 1 節 はじめに

第 2 節 学習方略の使用を規定する要因

第 3 節 学習方略の使用に対するメタ認知的知識の役割

第 4 節 個人差としての動機づけ

第 5 節 定期試験を基準とした測定時期

第 6 節 本稿の目的と構成

第 2 章 学習方略の使用を規定する要因の検討

第 1 節 目的

第 2 節 研究 1: 学習方略の使用に対する認知的要因と動機づけ要因の影響

第 3 節 研究 2: 学習者の学習方略使用の特徴と規定要因の違い

第4節 考察

第3章 学習方略の使用とメタ認知的知識の検討

第1節 目的

第2節 研究3: 学習方略の使用に対する方略知識の影響

第3節 研究4: 学習方略を「いつ」「どのように」使用するかの有効性の認知

第4節 考察

第4章 測定時期による違いの検討

第1節 目的

第2節 研究5: 試験時・平常時における学習方略使用の規定要因

第3節 研究6: 平常時の認知が試験時の学習方略の使用に与える影響

第4節 考察

第5章 有効性の認知を統制した達成目標の影響

第1節 目的

第2節 研究7: 単語の体制化に対する達成目標の影響

第3節 考察

第6章 総合考察

第1節 学習方略の使用と有効性の認知

第2節 動機づけの影響とその役割

第3節 教育実践へ示唆

第4節 本稿の限界と今後の展望

引用文献

APPENDIX 尺度と刺激

研究1, 2, 5 で用いた尺度

研究3 で用いた尺度

研究4, 6, 7 で用いた尺度

研究7 の刺激

3. 本研究の目的

本研究は、主に学校教育場面での学習活動の主要な構成要素である「学習方略」を中心に実証的な検討を加えたものである。より適切で効果的な学習を行うことに価値があることに異論を唱える者はほとんどいないと思われるが、どうすれば学習者にとって有効な学習が行えるようになるのか、いや、そもそも効果的な学習方法とはどういったものなのかについて根拠に基づいて明確に主張することは難しい。山口氏はこの問題に対して、「学習方略」「メタ認知」「達成目標」の三つの概念を中心として実験および調査によって一定の信頼できる知見をもたらすことを研究の目的とした。

学習方略とは、いわゆる学習の方法である。学習方略には、専門的な知識がなくても、

すなわち初学者でも利用可能な「リハーサル方略」と呼ばれる「浅い方略」に対し、学習者の既有知識を活用し、理解を深めることを通じて安定した知識の獲得につながるものが期待できる「精緻化方略」あるいは学習材料に内包される関係性情報に基づいて分類する「体制化方略」のような「深い方略」、さらには、学習者自身が自分の理解度を確認しつつ適切な学習活動をコントロールする「メタ認知的方略」などがある。こうした学習方略は、その方略に関する知識に基づいて、適切に使いこなすことが有効とされる。山口氏は、より適切な学習方略を選択し、学習場面で使うようになるためにはどうしたらよいかについて検討を加えている。

上述の「メタ認知」とは、認知に関する認知である。自分自身の認知活動に関わる「メタ認知的知識」と、認知活動を適切に調整するための「メタ認知的活動」に大別される。本研究で取り上げるのは、前者のメタ認知的知識の中でも、特に学習方略に関する知識である。それぞれの学習方略がどのような特徴を持っているのかという方略知識、その方略を使いこなせるという意味での手続的知識、そして「いつ」「どのように」用いるのが効果的かという条件知識を扱っている。

これらの学習方略をどの程度使うかについては、従来の先行研究では、動機づけがもっとも強く影響すると考えられていた。動機づけ理論にも種々あるが、本研究で主に取り上げているのは達成目標理論である。この理論は、学習行動が生起しているときに、学習者がどのような目標を抱いているかに関するものであり、学習内容・知識等を身につけたいという習得目標と、他の学習者よりもよい成績を修めたいという遂行目標とにわけて捉えられている。さらに、それぞれの目標について、「よい成果をもたらしたい」という接近と、「悪い結果を避けたい」という回避の両方向が想定されている。

本研究は、これら三つの心理的構成概念の関係性について、先行研究をふまえつつも、新たな研究の枠組みを精力的に提案する形で構成されている。以下、それぞれの章で検討されている内容の概要と、それに対する評価を記す。

4. 各章の概要と評価

第1章では、学習方略の使用を増やしたり減らしたりする要因として、主に動機づけ要因（第2節）と認知的要因（第3節）の二つの観点から先行研究を概観した。動機づけ要因と学習方略の関係についての先行研究を概観するにあたり、現在の代表的な動機づけ理論といえる、達成目標理論を中心に据えた。この理論は、課題達成場面において抱く目標やその程度に注目したものである。学習内容を習得することに重きをおく習得接近目標が高い学習者ほど、使用すれば学業成績が向上すると知られている学習方略をよく使用するということが先行研究によって示されている。その一方、ある学習方略を使用することを面倒と思う（コスト感を感じる）か有効と思うかというような認知的な要因は先行研究で取り上げられることは多くないが、学習方略の使用に影響を及ぼすという観点からは、動機づけ要因と同等かそれ以上に重要なものとして検討する必要があることを本研究では主

張している。この章では、以下の各章で検討することになる心理学の構成概念について、先行研究によって既に明らかになっている知見を説明するとともに、認知的要因を中心として捉え直す必要があることを明確に主張している。また、そうした新たな検討を加えることで、教育場面でより実践的な学習指導法を提案できるようになるであろうことを述べ、本研究の意義を明確に打ち出している。

第 2 章では、学習方略の使用の程度に対して、動機づけ要因と認知的要因のどちらがより大きな影響を及ぼすかについて、比較検討を行っている。先行研究では両者を同時に上げること自体が少ないという点で、検討するに値する問題設定を行っているといえる。研究 1 では動機づけ要因の変数として達成目標、認知的要因として学習に対する信念ともいえる学習観を、学習方略の使用に対する認知的要因として有効性の認知とコスト感を取り上げて質問紙調査を行った。その結果、動機づけ要因ではなく認知的要因の方が学習方略の使用に対して直接影響することが明らかになった。研究 2 では研究 1 でのデータを用いて、使用する学習方略の傾向によって参加者をタイプ分類した。そして、適切な学習方略を多く使用するタイプの学習者ほど、メタ認知的方略をよく使い、達成目標における習得接近目標が高いということが示された。第 2 章では、学習方略の使用の程度に直接的に影響するのは有効性の認知であるとしながらも、達成目標という動機づけ要因が、複数の学習方略の中から適切な方略を選ぶのに関係していることを示唆した。これらの結果は、先行研究では十分に検討されていなかった、認知的要因の重要性を示すと共に、動機づけ要因を同時に扱い、両者の関係性を検討することの意義を主張できている点で、今後の学習方略研究の枠組みに対して有用性が高い知見であるといえる。

第 3 章では、従来の先行研究では、検討対象となる方略についての知識を、参加者すなわち学習者が持っているかどうかについて積極的な統制を行ってこなかったことを問題視し、方略を使用できるようになるまでの個人内での過程を取り上げている。研究 3 では、学習方略そのものの基礎的な知識がある場合に、用いるのが有効だと認知している方略をよく使用していることを示した。このことから、方略を研究対象とする場合には、参加者が当該の方略に関する知識を既に有するか否かについて配慮すべきであるという新たな視点を提唱している。また研究 4 では、方略に関するメタ認知的知識に含まれる条件知識である、「いつ」「どのように」使用するのが効果的であると思うか、という有効性の認知について検討した。その結果、次のテストに向けて（短期的）、あるいは将来学習を続けていく上で（長期的）、使い続けることが効果的であると認知している方略であれば、方略の種類を問わず、よく使用することが示された。また、動機づけ要因である、習得接近目標が高い学習者と低い学習者では、これらの効果が異なることも示された。習得接近目標が高い学習者は学習方略の使用に対する長期的な有効性の影響が強く、習得接近目標が低い学習者は短期的な有効性の認知の影響が強くなる傾向があった。このように、第 3 章では学習方略の使用に対するメタ認知的知識に注目し、有効性の認知の基礎となる方略知識が獲得されることで、学習方略の使用も変化する可能性を示したという点で、先行研究

にはない視点を提示できているといえるだろう。

第 4 章では、研究として取り上げる学習活動を統制するため、多くの参加者が共通して体験しているであろう定期試験を対象とした。検討対象となる学習活動を統制することで、一定の期間を通じた学習について検討が可能となった。具体的には、定期試験までの期間を変数として、これまで明らかにされてきた学習方略の使用とそのメタ認知的知識や達成目標との関係について検討を加えた。研究 5 では、試験を強く意識する時期（試験 1 週間前の学習）では、研究 1 と同様に、有効性の認知のみが学習方略の使用に対して直接影響するのに対して、試験をあまり意識しない平常時（試験まで 1 ヶ月前の 1 週間の学習）では、有効性の認知だけでなく、他者よりも良い成績を取りたいといった遂行目標志向も学習方略の使用を増やすという形での影響を示した。研究 6 では測定された学習方略の使用の程度のデータについて、個人内の関係性と個人間関係性に分けて検討を行い、個人内関係性としては、測定時期にかかわらず有効性の認知が学習方略の使用に対して影響するということを示した。これらの結果は、質問紙研究を行う際に、実施の時期に対して留意すべきであることや、分析において個人内と個人間の分散を分離することの有用性を示したという点で、学習方略の研究領域に独自性のある知見をもたらしたと評価できるだろう。

第 5 章では、これまで得られた知見に基づいて実験的検討を行った。特に、動機づけ要因として検討してきた達成目標の影響の在り方が、第 2 章から第 4 章では一貫していなかったことについて、調査対象者の違いのみならず、検討対象となっている学習方略に関するメタ認知的知識の獲得状況の違いが原因であると考えた。そこで研究 7 では、用いることが好ましいとされる体制化方略について、方略に関する知識を教授し、練習をすることで、すべての実験参加者が体制化方略を使おうと思えば使える状態を整えてから実験を行った。その結果として、体制化は全般的によく使用されるようになったが、課題に対する主観的な難易度が高い（困難な）場合には、必ずしも体制化方略が用いられないことがあることが示された。その傾向は、課題遂行の前に、習得接近目標に方向付けられた学習者と遂行接近目標に方向付けられた学習者とで異なり、習得接近目標が高かった学習者は、課題に対する主観的な難易度とは無関係に、体制化をよく使用するが、遂行接近目標に方向付けられた学習者は困難な課題状況では、体制化を使わなくなるということが示された。これらの結果から、学習者が学習方略の使用に対するメタ認知的知識を十分に持ち合わせた場合には、達成目標志向という動機づけの違いが、学習方略の使用に影響することが、改めて明確になった。この研究では、これまでの質問紙調査による研究では関係性が明確とはいえなかった動機づけ要因と学習方略使用の関係について、実験的検討ならではの統制を利かせることで、再現性の高い知見を示しており、今後の学習方略および動機づけ研究にとっても大いに意義のある成果を伴っていると言えるだろう。

総合考察では、上述した各章の研究成果を概観し、得られた知見のまとめとその限界についてまとめた上で、教育現場における学習方略指導の有効な介入方法の提案を行っている

る。本研究で取り上げた変数は、必ずしも多様とはいえないが、だからこそ、扱った変数に関連した主張は明瞭な輪郭を持ち、説得力を伴っていると言えるだろう。

5. 本研究の総合評価

以下、本研究について法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻における論文評価基準に従って、評価する。

(1) タイトルの適切さ

本研究タイトル「学習方略の使用におけるメタ認知的知識と達成目標の役割」は、本研究の主要な構成概念の関係性を的確に表現するものとなっている。

(2) 問題の適切さ

本研究の目的は、学習者にとって適切な学習方略の使用をいかにして促しうるかという問題に対し、達成目標という動機づけ要因のみならず、メタ認知的知識を中心とした認知的要因から有益な示唆を導くことにあった。この研究目的および問題設定は、学校教育を主とした教育現場において意義のあるものであり、教授法やテストの実施を通じた実践的な応用可能性についても提案されており、学術的にも実践的にも有意義なものであると評価できる。

(3) 研究方法の適切さ

本研究では、既に先行研究における方法論として確立している質問紙調査による検討に終わらず、質問紙研究から得られた知見に対して実験的に検証を加えている。本研究での実験的な検討は網羅的というわけではなく、扱った変数は限定的であるとはいえ、両者の利点を活かしつつ、多面的なアプローチを取り入れたことは、本研究での主張をより強いものにするという点で適切であったと評価できる。

(4) データ分析方法の適切さ

本研究では、最新の知見に基づいて、個人間相関・個人内相関を適切に取り扱い、各研究において収集したデータに即した分析を用いている。想定されるモデルを検証するために、多くの類似した手法の中から適切な分析を選択している点で大いに評価できる。

(5) 図表表現の完成度の高さ

本論文では、多くの図表が用いられているが、その基本的な形式、図表のいずれが効果的であるかの選択、作成された図表の意味するところの明瞭さの点で、十分な水準にあるものと評価できる。審査対象となった学位請求論文には一部、図表の解像度が足りないという意味で視認性に欠けるものが含まれていた点については改善が必要である。

(6) 考察における文献の検討と問題との対応

本研究では、各章・各節において取り上げた問題に対応した先行研究を概観し、得られた結果に対してそれらの先行研究の知見を踏まえた多面的な考察を行っている点で、問題と考察の対応がなされており、一貫性が見られる。

(7) 論文の独創性

本研究は、学習方略を扱った先行研究においては、動機づけ要因を中核としているのに対して、方略に対する認知的要因の重要性を特にメタ認知的知識の点から、さらに個人間だけでなく個人内相関という観点からも検証している点で独創性があると評価できる。達成目標を実験的に方向付けるという手法自体は先行研究を参照したものであるが、単なる追試を行ったわけではなく、先行研究の実験手続きを批判的にとらえ、適切に改善している点は評価に価する。また、一つの研究内で質問紙調査と実験的検討を同時に扱っている点、また、学習方略の使用の程度を主観的な評定ではなく行動指標によって測定し検討対象としている点は、達成目標との関連を検討する研究領域において、一定のオリジナリティがあると認められる。

(8) 全体構成の論理性、明快さ

本研究は、概ね一貫して「学習方略」「メタ認知的知識」「達成目標」を主軸として論を展開しており、各章の関係性や全体での主張は明快でわかりやすい。一方で、個々の研究の調査・実験手続きや、分析結果の記述については、多少難解さが残るため、さらなる改善が必要であると思われる。

(9) 文章表現の明快さ、わかりやすさ、段落構成の適切さ

これらの点に関しても全体的に明快でわかりやすい文章構成がなされていた。一つ一つの研究に導入されている分析方法は高度に専門的な内容である一方で、主張したい心理学的な問題の本質ではない。その点、必ずしも一般的とはいえない、解説が必要と思われる分析方法は巻末の付録に回し、本論での論旨の展開を妨げないような工夫がなされ、適切であったと評価できる。

(10) 誤字・脱字・表現の不統一

提出された申請論文に含まれる誤字・脱字・表現不統一は許容範囲にあると判断できるが、学位論文公開に向け、適宜修正を求める。

6. 結論

以上により審査小委員会は、山口 剛氏提出学位請求論文「学習方略の使用におけるメタ認知的知識と達成目標の役割」を優れた業績であると評価し、山口氏を博士（心理学）の

学位を授与されるに十分な資格を有するものであるとの結論に達した。

以 上